

仲間を見捨てて惨敗した 石破首相の「居座り」は許されぬ

衆院選での自公過半数割れを受け、自民党内では来年に改選を控えた参院側を中心に石破茂首相の責任を問う声が強まっています。それでも、石破首相は国民民主を取り込むなど多数派工作を活発化させ、「居座り」とも言うべき態度に終始しています。立憲も小沢一郎氏が手練手管で野党連立内閣の実現を目指して動いていると言われ、11日に予想される特別国会での「首班指名」を控え、現状では先が見通せません。

続投しても政権運営は 早晚行き詰まる！

今回の衆院選は、結論から言うと、石破首相が解散を急ぐあまり、みずから選挙の争点を示さないまま相手の土俵で戦い、自滅したということでしょう。

大敗の予測に焦った石破政権は、旧安倍派の多

くの候補に対し、非公認と比例重複を認めない「制裁」を課しました。岸田政権からの経緯を冷静に辿れば、これが「二重処罰」であることは明らかでした。ところが、石破首相の思惑は外れ、かえってマスコミや野党の言う「裏金」問題だけに注目が集まる結果を招いてしまいました。しかも、選挙戦終盤には、その非公認候補に対し、恩を売るつもりだったのか、公認料・活動費として2000万円を配っていたことが暴露され、火に油を注ぐ結果となりました。

そうした中、全国を飛び回って苦境に立つ旧安倍派候補の応援も続け、高市早苗氏ですが、自身の奈良2区での10回目の当選が決まっても万歳をしませんでした。陣営のスタッフは「同志のことを思えば万歳などできるはずありません」と語りました。

自民党はなぜ、こんな人物を総裁に選んだ！

機を見るに敏な選対委員長の小泉進次郎氏は「(大敗の)責任は私にある」という世間受けをする言葉を残して泥船からさっさと逃げだしました。石破首相は森山裕幹事長とともに、これだけ多くの犠牲者を出しておきながら、続投を宣言しています。

経済学者の高橋洋一氏は自身のYouTubeで「石にかじりついて、破れかぶれ政権」と揶揄していますが、暫定的にせよ首相を続けたとしても、早晚、政権運営に行き詰まるのは目に見えています。

石破首相は敗因について、「党内論理を優先したことが厳しい結果につながった」と言い訳しましたが、自らを謙虚に振り返る姿勢は微塵も感じられません。どうして、自民党はこんな人物を総裁に選んでしまったのか。多くの人がそう思っているに違いありません。

各紙も退陣を要求

「職を辞するのが筋だ」

ちなみに、読売は29日の社説で「速やかに進

「選択的夫婦別姓」に高市案で対抗を

立憲・野田代表

「採決を迫り、自民党の賛成派をあぶりだす」

今後の政局が見通せない中、立憲の野田代表が、選択的夫婦別姓で自民党への揺さぶりを始めました。衆院選の結果が判明した直後に、「野党で2022年に共同提出した民法改正案がある。導入に向けて採決を迫っていく」と強調。さらに、「公明党は採決になれば、賛成するのではないかと。自民党も半分ぐらいの人たちは自主投票なら賛成すると思う。あぶり出す意味でも採決はしたい」と述べました。

慎重派議連の中曽根会長 「高市案をベースに」

一方、国連の「女性差別撤廃委員会」は29日、夫婦同姓を義務づける民法の規定を見直し、選択的夫婦別姓を導入することを求める勧告をしました。法的拘束力はありませんが、別姓推進派が勢いづくかもしれません。

これに対抗するには、各種の世論調査で多数を占める「夫婦同姓を前提とした通称使用の法制化」を早急に法案として打ち出す必要があります。そこで鍵となるのが、自民党内の「婚姻前の氏

退を決することが憲政の常道である」と主張。産経も「国民は衆院選で石破首相に国政運営を託したくないという判断を示した。それがなぜ分らないのか」と厳しく追及しました。朝日も「『自公で過半数』という自ら設定した最低限の目標すら達成できなかった以上、石破首相は職を辞するのが筋だ」と書いています。

通称使用に関する法律案 (高市案)

